

徳山近隣の霊場 その3

水上大師寺霊場

会員 渡辺 勝

はじめに

徳山市北山地区から峠をこえた水上地区最北部の山腹に大師堂がある。これを中心にした一帯に大小一〇四個の石祠石塔類が祀ってあって、ここも又これ迄に報告してきた霊場と同じように複雑した様相を呈している。それだけに興味をそそられて調査してきた。しかし探究未熟で決定的なものを求めえない状態であるが、こゝらでひとまず報告しておきたい。

一、現状

① 大師堂 (写真1) (第3・4図)

「都濃五十六番水上山大師寺」の額が掛った立派な大師堂(四・五×六間)で、堂内には弘法大師坐像・阿弥陀如来坐像・十一面観音立像(木像)が安置されている。

室内に掲げられている「由来記」を要約すれば「延喜醍醐帝期の頃国司周防判官盛俊は中山邑の風土を好み年を経

たが、驕奢が京に聞え三位中将秋基卿が下向し、富田に館居して執権した。盛俊は中将の毒殺を計ったが発覚して切腹。盛俊の弟刑部四郎は兄へ再三練(諫)言したが、かえって水上に蟄居されていた。今徳原となる人は四郎の末裔という。その後中将は病を得たが、易者の験により水上の泉を服用して治ると西国宝蔵記にある……嘉永六年記す。

……安永四年十二月改築……昭和五十六年いたみがひどく修復……とある。が大師堂がいつ誰によって建立されたかわからない(国司判官、三位中将にまつわる記事は「徳山近辺古跡探」に記載されているが確認?)。

文献をあたってみると「地下上申」に「一庵壺ヶ所 水上二有り 但由来等聞伝へ等無御座候事」とあるが、この大師堂のことであろうか。「山口県風土誌卷百十五」には「大師堂 同村の水ノ上、興元寺受持 宝曆年中創建」、「山口県寺院沿革史」には「興元寺……境外上村水上に大

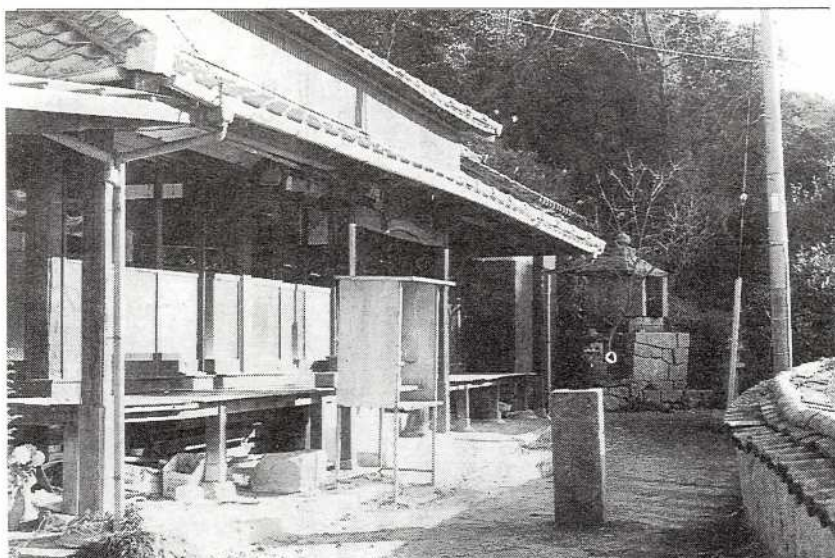


写真 1 大師堂（寺）

師堂あり。」とある。又「藩史」（明治三年）（徳山市史資料）興元寺の項に「庵室一ヶ所大師堂ト称、年曆不詳水上村造立」とのっている（地元では隠居寺だったという）。遺品として

・鰐口が軒にかかり「水上山大師堂了行信士若者中寄附享和四子年正月吉日 冶工防州徳山野村伊兵衛藤原信邦」

（陰刻直径二〇cm銅製）

・半鐘「防州水上村世話人徳原又右門同友右門天明三卯二月吉日富田住中村権兵衛藤原政房」（陰刻径三二cm

銅製）

・大鑿「防州都濃郡徳山水上山大師堂 興禪寺得禪代調

焉 施主花岡上原惣左エ門下松浅□久左エ門 文化四

丁卯十一月吉日 金竜子作」（陰刻径三三・五cm銅製）

・境内には幟台・石柱（花崗岩製）・水船（安山岩製）があり、刻字は第3図に示す通り。

・堂内の位牌を拝まして戴く。参考になりそうなものは第4図位牌欄に略記した通りで、これ以外は近年のものである。

② 富田八カ所祠

前記大師堂と並び東側に第四三番石祠がある。又大師堂の西方約一〇〇mの山際に四二番がある。（総高約七五cm



写真2 鳥羽大師祠 左端に富田88カ所祠

安山岩製 明治二二年

③ 鳥羽大師祠 (写真2)

富田八八カ所四三番祠の東側にある。宝形造扉両開花崗岩製。総高約三・三m(基礎二重基壇共)。本尊大師単体丸彫像花崗岩製。実に重厚で風格のある造りである。露盤四方には種子四字を配し、軸部には左記の刻字がある。

(向って右側面)

「安永四乙未之天

大願主 鳥羽氏

閏十二月二十一日也」

(裏面)

「当八十八ヶ所大師堂庵主

開山 真言大乘

定林観全房」

(向って左側面)

「一天四海安穩泰平

為記□施主武運長久諸願円満也

風雨順時五穀成就」(陰刻)

祠前の石灯籠(一基 総高一三〇cm花崗岩製)には「奉造立 施主徳山住永野弥市右衛門純員 安永六丁酉十月十九日」と陰刻してある。

④ 水上新四国八八カ所(写真3)

大師堂の裏山に葛折りに配列してある。祠型は、基本原形は四角埵刳抜型、総高約六〇cm、窓形は□・凸・凸・駒・

華燈の混合、切妻屋根安山岩製。本尊は舟型半肉彫安山岩

製が原型であろうか。祠胴前面に札所番号・本尊名称を、左側面（或いは右側面）に施主名を陰刻してあったものが原型であろう。これらが読みとれるものは第3図に記載したが、大部分は長年月と軟石質のためか磨滅して読みとれない。又破壊してしまったものすらあるし、変則的となっている。つまり勤請当時のものではなく後（近世下期）明治初年）に補欠されたようである。例えば「二十三番平野小川屋権兵衛」その他読みとれる施主名である。前者は富田平野町の人で、天保く嘉永の頃の人。藩の産物吟味役をしたり天保二年の大一揆の時には打壊しをうけたり塩田工事に参画、その他玉垣寄進等をしている。後者は「世話人馬嶋藤井直吉、石丸久吉、同善兵衛」（写真4）「六十一番施主徳原万治良」等である。

配列は大師堂左側からが順拝順であろう（少々くい違っているが）。これより山頂へ登り大師堂右側へ下ってくるようになっている。山頂の高い所に総鎮守とみなしてもよいように金毘羅・蔵王・篠の三権現が並祀されている（本会誌第一一号P55第7図参照）。又順路中腹に「本宮熊野坐大権現……」（花岡岩製）が祀られている。又山頂のちょっとした広場には三権現祠に対するように次のものが奉納さ

れている。

・高灯籠 一個 総高約二九〇cm 花岡岩製

「夜燈 奉願主為安全 安永五年丙申三月吉日

世話人 水上新七石田小七」（陰刻）

・灯籠 一對 総高約一七〇cm 花岡岩製

向って右「献燈 願主福川中 天保十二丑五月吉日

「世話人兼重武右衛門 徳原周助

鑑司益仙代新添」

向って左「献燈 十万施主 天保十二丑五月吉日

世話人（右に同じ）」

⑤ その他（第3図）

上記以外に第3図に示すように僧の墓碑（位牌の数より少ない）・万霊碑等が大師堂左側に配列されている。

尚水上霊場とすることはできないかもしれないが、大師

堂の隣東方の山頂に石鎚祠が祀られている。総高約八〇cm 花岡岩製。前面軒唐破風屋根の額には「石」の字を陽刻。

これに対する石燈籠は「常夜燈 明治十一寅旧三月十七日

講中北山小野吉田矢櫃水上」と陰刻したもの一箇及び破

損した自然石製一個がある。

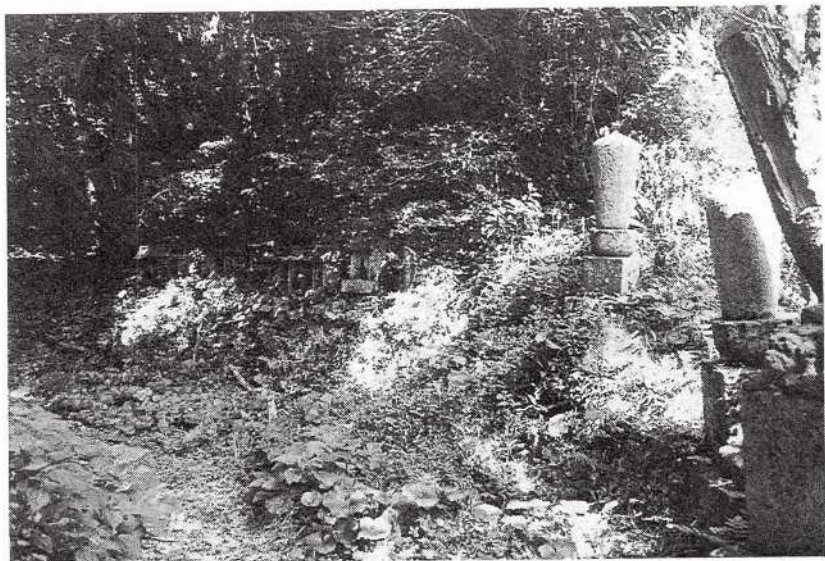


写真3 88カ所登口

右端に開關主および厭登大徳無縫塔、先方に88カ所祠が並ぶ



写真4 88カ所祠補欠の一つ

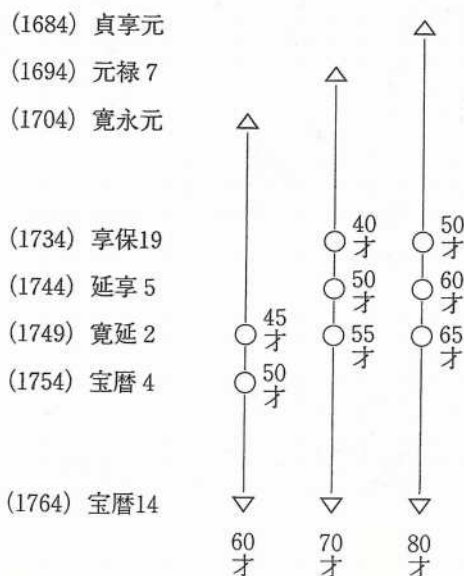
「世話人 馬嶋 藤井直吉」、先方に四角塼削抜型祠

二、大師堂に関する考察

大師堂はいづ建立されたのであろうか。所在の位牌・遺物類を時系列的に整理して検討してみることとする（第4図参照）。

まず創建年であるが「由来記」のこの種のいい伝えは額面通りにとる訳にゆかないのが通例である。しかし安永四年改築は正しいのではあるまいか。それが老朽化によるものとする、その頃既に少なくとも三〇〜四〇年は経過しているに違いない。とすると凡そ延享〜享保頃の建築と推定される。「山口県風土記」の宝暦年中創建に近い。しかし延享二年作製の信憑性の絶対的な「地下上申」の上々村の項に「一庵荅ヶ所水上ニ有り」とあるように、庵（これが大師堂であろう）は既に宝暦以前にあったことになるので、宝暦創建の記事は誤りの可能性大である（古老によると古くは庵は現在地の下方にあったと言われていたということだから、現在地へこの時移転改築されたのかもしれない）。

さて次項で述べるように開基は宝暦一四年に死去している。年齢は大徳という位の長老長命の僧が隠退し庵を開いたのであろう。仮に六〇〜八〇才とすると次のようになる。



庵は既に延享二年にあったのだからそれ以前で、五〇才前後で隠退したとすると享保一九年頃である。これから享保年間の創立ではなからうか（この間でも享保五〜一三年の公算大である）。

次に創建者であるが、位牌の内に「当庵開基教蓮社厭譽 倣了大徳位 宝暦十四年甲申歳三月八日」がある。この僧が開基であるが摺み得ない。しかし戒名の

蓮社は浄土宗で出家僧の法名に蓮社を冠して称する伝統があり、厭譽の譽は浄土宗の譽号と考えられる。大徳は高僧長老に対する敬称で、特に近世では名利を厭い寺院住職とならなかつた高僧をさして用いるようになった。というように浄土宗の僧である。

外に「当山二世大愚道樹大和尚禪師」「当山三世中興仏国道仙大和尚禪師」「蓮宅寺中興開山権大僧都法印宝山大和尚位」「興元寺廿六世黙室泰禪大和尚禪師」「興禪二世当山四世大仙光禪大和尚位」等の位牌がある。戒名の

和尚は元々単に高僧の尊称だが、禪宗・浄土宗等では亡後においては一寺の住職・能化の法名に尊称として付している。禪師は宗派を問わず高僧に尊称として贈られたが、後には禅僧の敬称として用いられている。道号は仏道を証得した者が称する出世の称号で一寺の住職ともなれば持ち平僧にはないという（禪宗に始まったが他宗にも用いる）。大僧都は真言宗の僧についている。

以上及び第4図位牌等が物語っているように、異なる宗派の僧が隠棲していたらしい。ひっかかることは位牌のある（明治期）蓮宅寺宝山和尚・興元寺廿六世和尚の墓は各々蓮宅寺・興元寺に立派な墓があり、他の僧の墓は二基あるのみである。このようなことが地元で隠居寺といわれる所

以であらう。現在は無住であるが、一時的には下松市真言宗多聞院副住職やその他で季節々々の法会が営まれていた。

三、水上新四国八八カ所の考察

① 八八カ所の創始者・勸請年

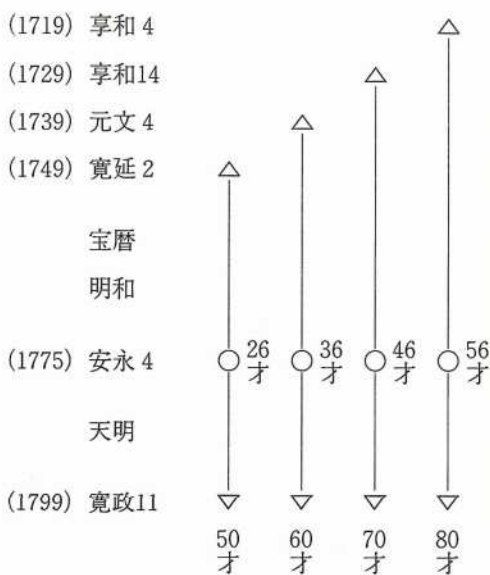
八八カ所に関する文献は前記のものと僅かに次のものしか発見できなかった。

「都濃郡誌」（大正二三年） 徳山町の項に「北山の後部水上の連丘に八十八個の祠を配す晩春首夏の候大師信者の之に賽するもの多し景色絶佳の處なり」

大師寺の位牌に「新四国開山 観全定林庵□位 寛政十一未□三月□」がある。又境内の無縫塔に「新四国開闢主 観全定林庵主位 寛政十一年未三月九日」がある。更に鳥羽大師祠の裏面に「当八八カ所開山大師堂庵主真言大乘 定林観全房……安永四……」と刻されている。

以上により定林観全房がこの八八カ所の創始者であることがわかる。

ではいつ勸請されたのであろうか。前述のように八八カ所開山は寛政一年に没している。この人の死亡年齢が五〇〜八〇才とすると安永四年には二六〜五六才となる。



八八カ所を開くには本場を順拝し、場所の砂を戴くとい
うような事も行つたであろうし、多くの人々の賛同浄財も
必要だ。このような大事業を起こす充実円熟且行動力のある
年齢、それは四六〜五六才頃ではないだろうか。とする
と安永一〜四年の間に開かれたと推測される（幅を見るな
らば宝暦一三〜明和二年とも考えられるが）というのはこ

の時は徳山地方は前の災害の傷ももどり稀に訪れてくる洪水・干魃・蝗害等の被害のない平穏な実りを迎えた期間である。八八カ所のような民衆を対象とした大事業を計画するには、絶好のチャンスであった。各所の寄進をその地区の豊凶災異と照合して考えたと必ずといってよい程符合し説明できる。農本位の時代当然であるともいえるのである（拙著「徳山新四国八八カ所」第四表災異表の内徳山藩の欄参照）。

② 八八カ所の権現祠

第3図に示すように大師堂の裏山に八八カ所が配列してあるが、途中に熊野権現、そして順路中央頂上の広場北の高所に南向きに三権現祠が祀つてある。

この三権現祠は拙著「徳山新四国八八カ所」にも記載した三権現祠（本会誌第一一号P54第5図に図示）に対象されるように、いわば総鎮守というべきものである。この三権現祠は向かつて左から蔵王大権現、中央に金毘羅大権現、右は篠大権現。「願主 谷野氏 家中同伴十万同行中 天保二辛卯三月吉日」と陰刻され、総高一〇七cm花崗岩製。唐破風屋根、両開扉、本尊駒型。更に丁重にも周囲を延長約一二m、高さ約一・九mの石垣土塀で囲んである。当初には覆屋根も設けられていたであろう。又台石二段及び広



写真5 頂上の三権現祠

場から祠までの石段も奇進されたであろう。

八八カ所と権現との関係については、拙著「徳山新四国八八カ所」を参照して戴ければ、金毘羅・山王・熊野についてはわかるが、ここには聞きなれない篠大権現というのがある。これと蔵王大権現を祀った根拠を説明しておきたい。

・篠大権現

「四国遍礼霊場記」(寂本著)に

「篠山 観世音寺

……山上は三所権現といふ。熊峯(熊野山)の神にや。……まわりにささ竹繁し。霊異の事をいひ諸病に用ゆ皆験ありといふ。別して馬のやむによし。此所札所の数とせずといへども皆往詣する霊境なり」とある。

又「澄禅 四国遍路日記 附解説校注」には次の記事がある。「月山・篠山はオツキ・オササ(第四十番観自在寺の奥の院)と称して、神仏分離以前までは名だたる番外札所で、遍路はどちらかを必ず順拝する風習があった。現在は月山は月山神社、篠山は篠山神社と称し、篠山権現を祭祀するが、いづれも遍路から姿を消している」「御篠山は高知県と愛媛県の県境にある篠山のこと。ヲササはこの頂上にあるお篠権現のことなり」。

・蔵王権現

金峯山（吉野山）で役ノ行者が感得した靈像が蔵王権現と伝えられていることは周知の通りである。金峯山信仰そのものは古くからありこの信仰と蔵王権現信仰が結び付き、その後大峰信仰系統の修験者が全国に行脚して各地の靈山へ権現像を安置するようになったという。金峯山で修行した僧で最も有名な僧が弘法大師である。そして蔵王権現は四国八八カ所にも鎮守として少なからず祀つてある。

このように二権現共係わりが深いのである。

③ 三権現祠寄進の谷野氏

このように立派な権現祠を祀つた谷野氏とは誰であろうか。当時徳山周辺で唯一の八八カ所に寄進した谷野は徳山地区の人といえる。徳山の谷野といえば大商人・藩士の二家が見られる。両家の家譜を要約して第2図に示す。

この内前者の谷野は「徳山市史料 中」献納賞美の項及び「同上」町方屋敷割図に多くの地所をもち、その他に多く見られる大商人で、藩から四五石中小姓格の厚遇を受けている。この家で関係のありそうな人の事跡を第5図に示した。寄進した天保二年は政蕃の時代で三七才。養子となつた武勝はまだ幼いと思われる。本家の方敬は先年大阪で亡くなり子の常則は江戸詰で、権現祠には関与していな

い公算大である。かくして政蕃が財力もあり寄進したものと考えられる。

発起として思い当る点はむしろ政蕃の妻にあるのではないだろうか。つまり二〇才前後の若い兄を失つたその翌年、急遽婿養子をとらざるをえなかつた。そしてその翌年遂に五六才の父が充実期に死去した。ついで嫡子を四一五才の可愛い盛りに幼死させている。思えば祖父も四二才の若さで働き盛りを惜しくも早死している。夫政蕃も結果的に四五才で亡くなるように総じて薄命で、その後子ができなかつたのであろう又養子を迎える様な状況など、度重なる悲運が神仏に祈る動機と考えたい。だから「家中同伴」と祠に刻したし諸病に験がある篠権現を祀つたのであろう（それにしては何故「谷野氏」と姓のみであるのか。女願主だったからか、養子であつたからか又複数だったか。次の養子武勝は徳山八八カ所三権現祠寄進者の一人として「谷野金助」と刻名しているが）。

④ 八八カ所とその他の堂祠との関係

既述してきたように享保年間大師堂（当初は大師堂ではなかつたか）が建立され、四〇〜五〇年後の平穩が続くチャンスに八八カ所が勧請され、又老朽化した大師堂改築の発起がされたであろう。と共に後述の鳥羽大師祠についても

大師堂改築に因み、鳥羽氏は武運長久この平穩と豊かな稔りの続くことを祈願して大石祠を寄進した。八八カ所頂上の広場に立てば眺望絶佳、徳山湾を眼下に給島・馬島・大津島・富田・福川沖さては遠く四国（八八カ所）を遙かに望むことができる。反対に沖の漁船からも海神金毘羅を拜されるこの位置に翌安永五年一般浄財で、安全を光明をいづまでももたらして戴くようにと三mの大灯籠も寄進されたのである。時は移り天保二年大切な鎮守三権現が勧請され、霊場としての体裁がいよいよ整ったといえる。この頃には八八カ所は近辺になく大いに賑わったことであろう。次いで福川から灯籠が他からも種々寄進され、明治になって熊野権現が祀られた。それは金毘羅・蔵王は既に祀られているが鎮守として欠かすことのできない熊野を追加したのである。

ここで付記したいことは現大師堂の額に「都濃五十六番」とあるが、この番号設定は後年この大師堂に便乗して設定されたものである。というのは他の都濃霊場祠の刻年は大正一〜一三年であるからである。

四、鳥羽大師祠の考察

① 寄進年

既述のように祠の側面に「安永四年」とはつきりと読み

取れるので疑う余地はない。ただ何故この時かが興味をそられるところである。

② 願主 鳥羽氏について

徳山地区で鳥羽といえは徳山藩家老家とその分家、徳山町人及び富田鳥羽屋が見うけられる。譜録及び鳥羽家所蔵文書等から藩士の二家の系図を略記すると第1図のようになる。徳山町人の鳥羽は「御家頼分限帳」（異本天保三壬辰三月改）に「御在所御心附 鳥羽愷輔 三人扶持内一人扶持減少天保六乙未年より」とある。愷輔はこれが示すように藩士ではなく商人らしいが人物像が掴めない。次の富田町人の鳥羽屋藤助は文政八年頃製蠟業を行っているがどんな人物かわからない。

さて問題のこの素晴らしい石祠を寄進するには強大な財力を有するに違いない。前記の内どの人であろうか。家老鳥羽家には系図が示す通り分家が二家ある。その一は直昌だが第5図のように正徳二年家断絶となっている。その二は経定家だが陳定は五人扶持から約一〇年前二五石となつて間がなく大きな寄進は無理と言わなければならない。鳥羽愷輔及び鳥羽屋藤助も大商人とは言えないようだし、年代に開きがあり関係付けることに無理がある。とするとやはり家老家の寄進ということとなる。

では家老家の誰が、寄進の動機は何であろうか。第5図のように図書は既に二〇年前没し無関係。次の衛士（七才）は隠居の身。その子玄蕃は三七才加判役という藩政府二番目の重要な地位にあり活躍した頃である。その子静馬は七才で勿論無関係。従って最も可能性の高い人物は衛士である。年齢的にも格好である。

衛士にとって相応の動機は何か。衛士は藩再興時から加判役次に最高の当役についている。ところが寛延元年御咎により大道理へ押隠居（罰の一つ）となる。同時に分家の經定も出仕に不及と大道理へ退去（三年三ヵ月後死）されている。時に衛士四三才・男の大厄四二を過ぎたばかり。かくて押隠居の身一四年の後、富田の平野へ隠居を許され、更に九年の後徳山出入りを許されている（六七才）。実に二三年の長きにわたる追放の身であった。

御咎の理由は、調査未了（「御蔵本日記」からも発見できている）で憶測となるが、潜在的には次のようなものがあったであろう。即ち押隠居されたときの藩王は廣豊で、廣豊と衛士は表向きは同年である（実は衛士が四才年上）。衛士は藩再興時よりの重役でキャリア充分、廣豊は藩再興より二代目藩主である。廣豊の子は実に四八人。將軍家斉の側妾四〇人、五五人の子には及ばないにしても仲々の艶

福達者の人である。このような事からか、封建時代の君臣の關係からか、丁度神村將監断絶事件の例のような事があつたのではなからうか。

さて衛士寄進の動機だが、長い御咎の世界から解放され、晴れて徳山へ出入りできるようになった時、大師堂改築計画があつた。その直後の安永二年旧主君廣豊が下松邸で死去している。古稀を迎えて尚健康な衛士は、良しにせよ悪しきにせよ怨讐を超え（子玄蕃は現在藩重役で、將監のような断絶ではない）、主君や累を蒙つて彼の地で亡くなつた叔父經定の冥福を祈り、天下の太平豊作を特に武運長久や諸々の意味あいがかもつた願が満つようと、一念発起したのではなからうか（だが大師祠に「鳥羽氏」とのみ刻し名を入れなかつたのは何故か。一族挙げての祈願か、或るいは嘗てはお咎の隠居の身という遠慮、はたまた何かの予防的配慮というのは考え過ぎであらうか）。

最後に残る疑問は、何故殊更に山里の水上大師堂へ寄進したのであらうか。只時間的な偶然であつたのだろうか。更に親全定林房庵主と鳥羽衛士とがどうつながるのか材料が見つからず説明がつかないのである。鳥羽氏は代々本正寺が菩提寺である。大迫田の墓地には堂々たる墓石が立ち並んでいる。だのに水上大師堂へ何故大師祠を寄進したの

であろうか。衛士は大師信仰者だったのであろうか。或いは真言宗らしい観全定林房その他と長い追放期間に何らかの交誼があったのか。

因みに鳥羽氏後裔は現在の毛利町三丁目(藩政期の屋敷)に立派な庭園と閑静な佇まいの割烹旅館「青山」を経営しておられ、座敷から庭を賞でながらのお食事処としても仲々好評であることを付記しておきたい。

五、富田八八カ所・都濃八八カ所

調査未了で次の機会に報告することとする。

おわりに

当周南地方でお大師様といえは秋穂が最も有名で、徳山からも多くの人が順拝している。しかしこれも水上に比べれば遅れること約一五年後の天明三年に開かれている。つまり周防では水上は最初の八八カ所と言え、春秋の縁日には旧徳山市内西部一帯の善男善女が「南無大師遍照金剛」と杖を引く姿が続く。だが余りにも古く破壊もあつたりしていることが残念である。

調査に当りこの霊場も又浮世の有為転変や無情はかなさを大師に訴えているような気がしてならなかった。一方少ない資料による調査の為、大胆な仮説と独断と偏見思い込みを寛恕戴き考察を進めるならば、本文のようである。そ

れでも尚浅学の筆者にとつて解明できない面を多く残している。今後の調査に待つこととし諸先輩のご批判ご指導を願うものである。

最後に鳥羽家、多聞院並びに水上地区のご協力戴いた多くの方々へ深く謝辞を申し上げるものである。

(平成三年九月二八日例会発表)

主な参考文献

遍路―その心と歴史

修験道

修験道の発達

澄禅「四国遍路日誌」附解説校注

徳山藩家老 神本将監断絶記

山口県史料

もりのしげり

日本の歴史 一八

徳山市史

徳山市史史料(S一九・S四一)

新南陽市史(S六〇)

仏教大辞彙

仏教儀礼辞典

日本史辞典

小学館

角川書店

名著出版

大東出版

神本正律

山口県文書館

時山彌八

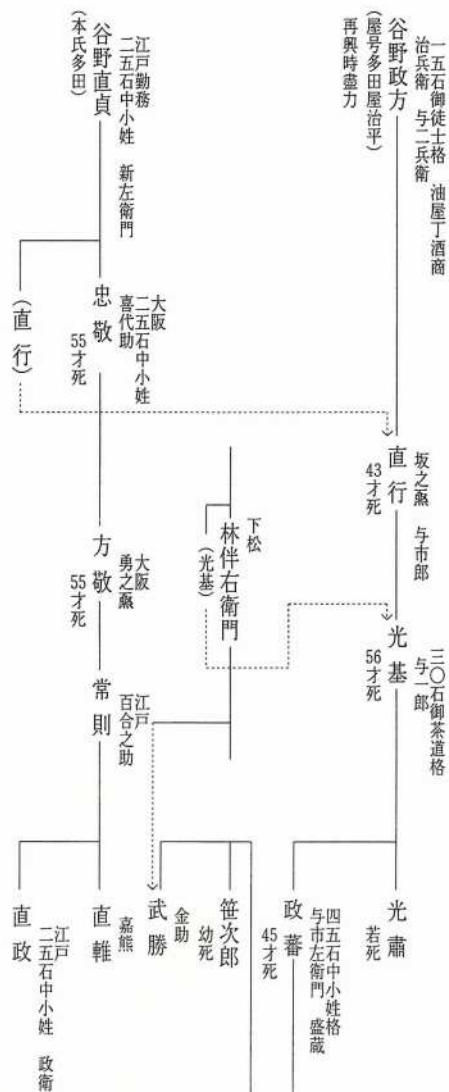
中央公論社

富山房

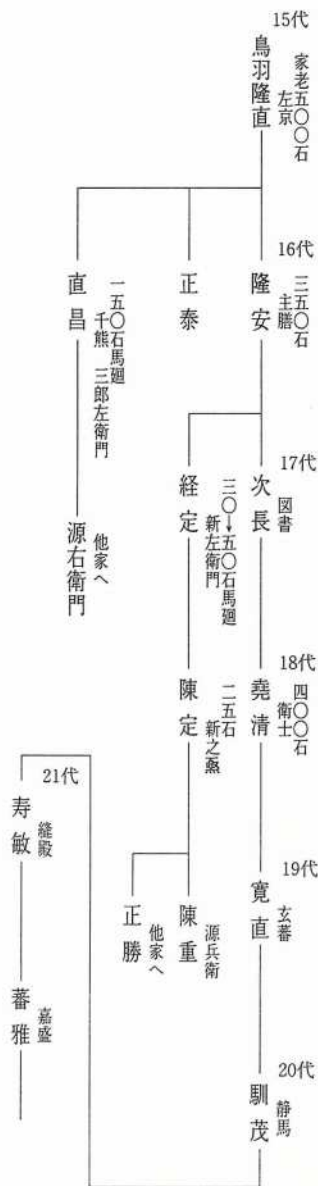
東京堂出版

創元社

第2図 谷野家系図

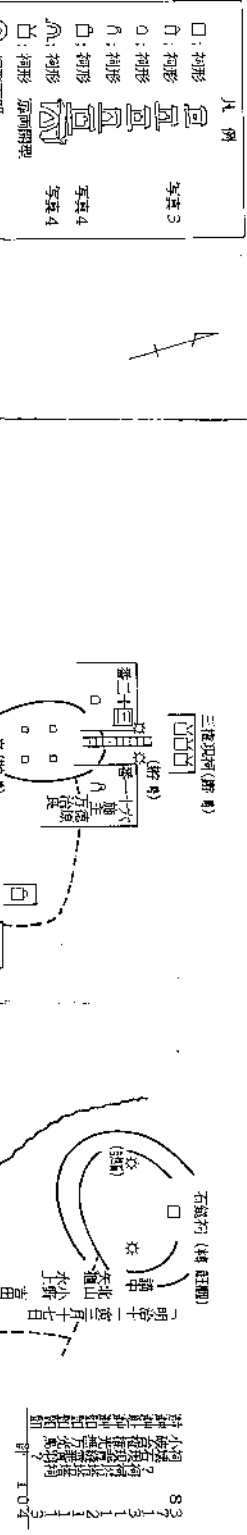


第1図 鳥羽家系図



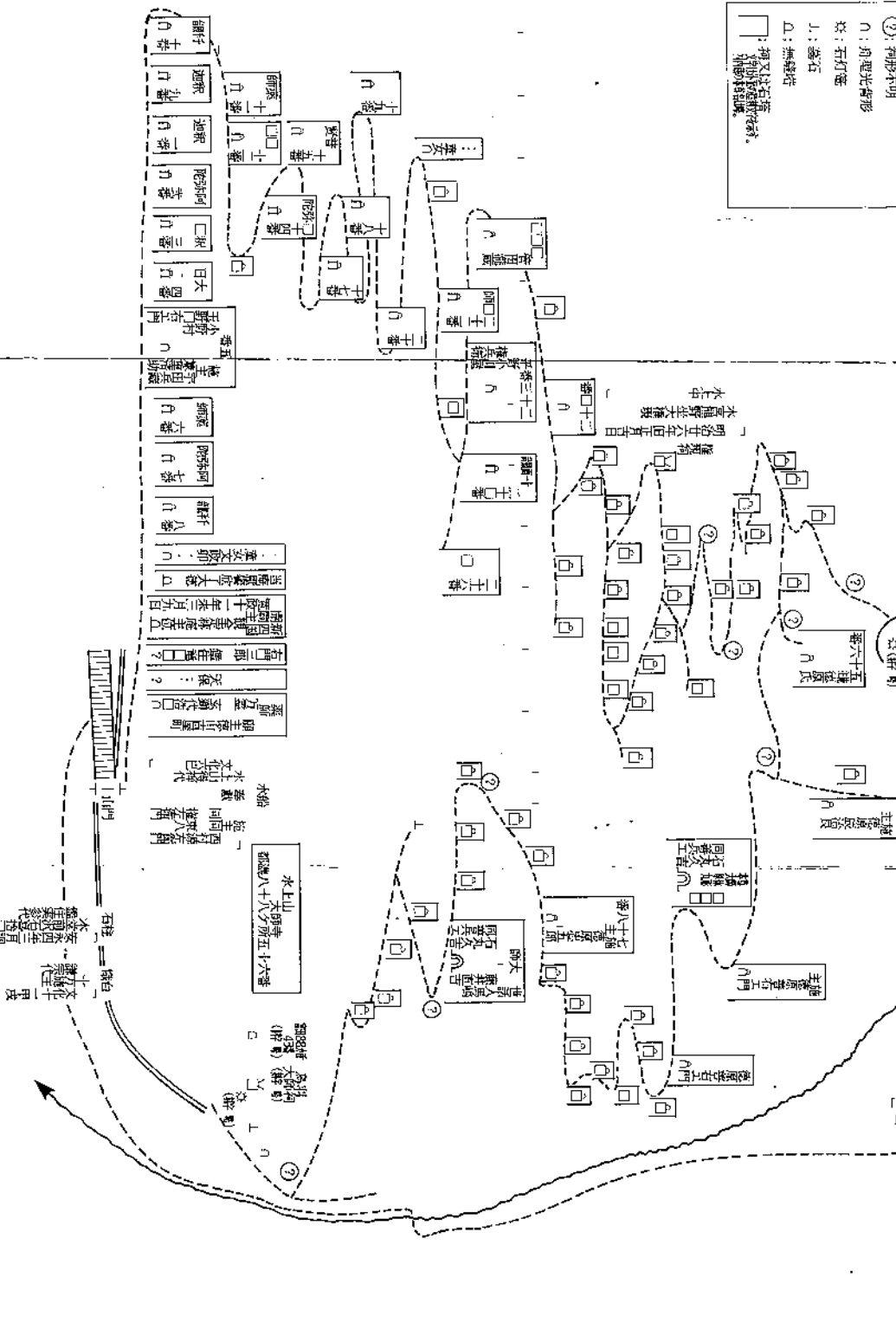
第3图 水上皇塚跡示意图

5.50.12.8 第 9.52.2.12 續



例
□: 构形
○: 构形
△: 构形
①: 构形不明
☆: 基石
△: 無礎柱
□: 柱礎石遺蹟(柱礎石遺蹟)

写真3
写真4
写真4



年代	資料		位 牌	寄 進 品 ・ 文 献
	901~	延喜		
1678	延宝	6		
1680		8		
1685	貞享	2		
1687		4		
1699	元禄	12		
1704	宝永	元		
1705		2		
1712	正徳	2		
1716	享保	元		
1719		4		
1739	元文	4		
1740		5		
1741	寛保	元		
1745	延享	2		
1748	寛延	元		
1752	宝暦	2		
1755		5		
1760		10		
1762		12		
1763		13		
1764		14		
1768	明和	5		
1769		6		
1771		8		
1775	安永	4		
1776		5		
1777		6		
1778		7		
1779		8		
1780		9		
1783	天明	3		
1784		4		
1785		5		
1788		8		
1789	寛政	元		
1790		2		
1795		7		
1799		11		
1804	享和	4		
1807	文化	4		
1808		5		
1809		6		
1811		9		
1814		11		
1817		14		
1818	文政	元		
1819		2		
1822		5		
1824		7		
1827		10		
1831	天保	2		
1834		5		
1836		7		
1839		10		
1841		12		
1847	弘化	3		
1849	嘉永	2		
1857	安政	4		
1867	慶応	3		
1870	明治	3		
1884		17		
1893		26		
1894		27		
1904		37		
1924	大正	13		

年代不明
 ↑当寺開祖の外弁之大和尚禪師
 ↑当寺前住松山道林贈和尚品位
 ↑覚心庵累功積善大徳位
 銅鏡 小